

<研究ノート>

絶対的判断と相対的判断課題における 年齢の影響

—相互独立的・協調的自己観尺度において—

中 村 奈 良 江

The Effects of Ages on the Absolute and Relative Judgement Task: On
the Assessment of Independent and Interdependent Construal of Self

Narae Nakamura

私たちは、日常の判断においてさまざまな判断を行っている。判断の際に生じる情報の処理過程には、ボトムアップ処理、トップダウン処理がある。ボトムアップ処理は、情報のもつ具体的な属性をもとに判断する過程であり、トップダウン処理は、概念といった知識の上位概念から個々の情報を判断する過程で、推論が含まれている。また、個々の詳細な情報が無視される場合も多い。

このような思考プロセスの中に、文化を念頭に置いた違いも指摘されている。たとえば Nisbett (2003) は「包括的思考と分析的思考」を提唱している。「包括的思考」は人や物といった対象を取り巻く「場」全体に注意を払い、そうした文脈との関係に基づいて対象をとらえようとする思考であり、いわば全体的なとらえ方の一つでもある。一方「分析的思考」は文脈から対象を切り離してとらえ、それを構成する属性に注目し説明する思考様式であり、スポットライト的なとらえ方である。処理の仕方との関係を見ると、「包括的思考」はトップダウン処理のように概念を元に推論することとは違い、共通項目を見いだしていると考えの方が良いであろう。一方「分析的思考」は、個々の事象の内容

を具体的に取り上げて考える思考タイプであり、ボトムアップ処理とほぼ同じ過程と言ってもいいであろう。Kitayama, et al. (2003) もまた、「棒—棒組み検査」での反応を示し、反応には、対象とする図形の周囲の状況がかかわっているという場依存の概念を指摘し、場依存が強く働く反応は相対反応であり、場に依存しない反応は、対称図形の属性そのものを基準に考えることから、絶対反応であるとのべている。

さて、絶対反応、相対反応については、学習の移調についての古典的研究 (Kuenne, 1946) で既に論じられている。この実験は、図形のペアの大きさ判断実験である。まず訓練刺激を用いて“当たり”を学習し、その後、それと同じ、または異なる大きさの図形を含むペアの“当たり”を判断する課題（「近テスト」と呼ばれた）と、同じ大きさのものを含まずに、相対的な大きさが2つある図形の中から“当たり”を判断する課題（「遠テスト」と呼ばれた）によって構成されている。この結果から、相対的判断は発達に伴って多くなることが示された。絶対判断は、その図形のもつ特徴のみを即時的に反応するものであり、特徴のみという点に注目すると周囲から独立して判断されていると考えられる。

一方、認知的判断とは異なり、人間関係にかかわる自己観に置いては、Markus & Kitayama (1994) によって、文化を背景にして自己観が相互独立的自己観と相互協調的自己観に分かれるというモデルを提唱されている。相互独立的自己観とは、自己が他者から独立しているという自己観であり、相互協調的自己観とは、人間関係の一部としてとられている自己観である。

思考プロセスという観点から考えると、自己観のような人間関係に関する思考の場合と対象物のとらえ方の思考の場合では、思考の対象とする事象が異なっているが、その場合も思考の様式は個人の中で一貫しているのだろうか。また、この場合、年齢による一貫性に違いが生じるのであろうかという疑問が考えられる。本研究では、この点について検討することを目的としている。

方 法

調査参加者

大学生（18歳～20歳，118名）及び，この大学生が世代違いの知人に依頼して得た結果から参加者数の多かった40歳代（40歳～59歳，93名）を抜き出し使用した。参加者の合計は210名であった。^{注1)}

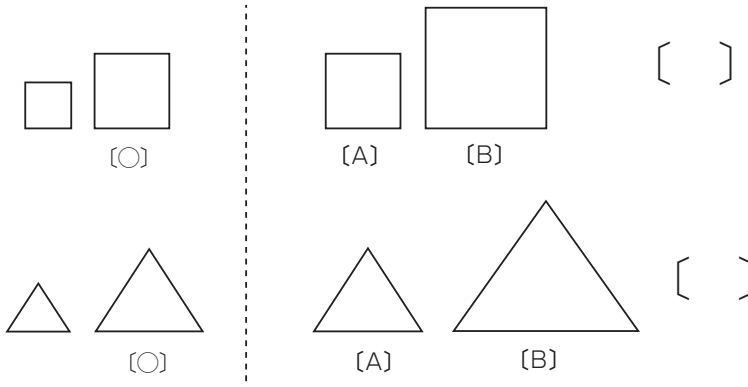
課題

自己観を調べるために相互独立的・相互協調的自己観尺度を用いた。また，認知的絶対判断・相対判断を調べるために，図形判断課題を用いた。

相互独立的・相互協調的自己観尺度（高田他，1996）は，相互独立的自己観を独立①「個の認識・主張」，独立②「独断性」の2因子に，相互協調的自己観を，協調①「他者への親和・順応」，協調②「評価懸念」の2因子に分け，合計で，4つの下位尺度で尺度を構成している。

図形判断課題：中村（2021）の課題のうち典型的な4図形のみを利用した。左側の図形の組み合わせのうち“当たり”を丸印で示し，右側の図形の組み合わせから“当たり”と思うものを答えるように求めた（Fig.1 参照）。

Fig.1 図形判断課題で利用した図形の例



手続き

自己観尺度の質問紙と図形判断の用紙はネット上にアップロードされ，大学生

の参加者はこれらを自分自身でダウンロードし、自分自身で回答したものと、知人にこれら2つの質問紙に回答するように依頼し回答させたものを提出するように求められた。

結 果

1. 参加者の分類

参加者は、図形判断課題の結果をもとに絶対判断群の割合によって図形判断傾向を調べるために絶対判断群の割合が25%以下群、50%群、75%以上群の3群に分けた。25%以下群(大学生66人、40歳代8人)、50%群(大学生23人、40歳代40人)、75%以上群(大学生29人、40歳代45人)であった。

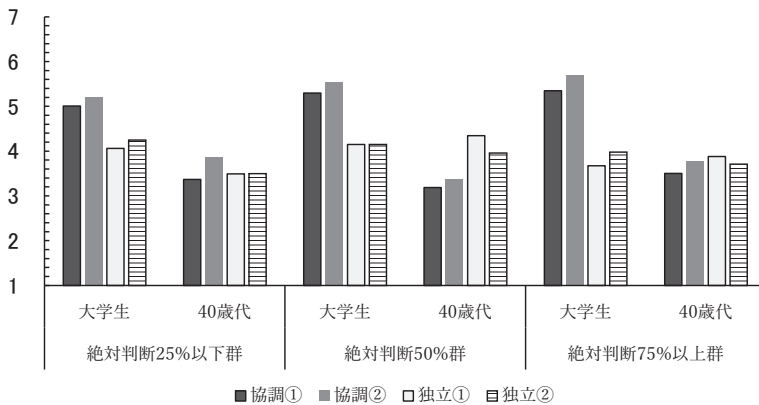
2. 図形判断傾向と年代による相互独立的・相互協調的自己観の強さの違い

図形判断傾向と年代、相互独立的・相互協調的自己観の3要因の分散分析の結果、図形判断傾向の群の主効果は認められなかった($F=1.499$, $df=2,205$, n.s., $\eta^2=.014$)が、年齢($F=165.883$, $df=2,205$, $p<.001$, $\eta^2=.447$ 、自己観($F=14.021$, $df=2,615$, $p<.001$, $\eta^2=.064$)の主効果、年齢と自己観の交互作用($F=31.184$, $df=3,615$, $p<.001$, $\eta^2=.132$)が認められ、図形判断傾向と年齢、自己観の交互作用に有意傾向があった($F=2.382$, $df=6,615$, $p<.10$, $\eta^2=.023$)。自己観の交互作用に有意傾向があったことからさらに多重比較の結果は以下の通りとなった。

大学生では、25%以下群、50%群、75%以上群のすべての群で有意差が認められた(順に、($F=9.452$, $df=3,615$, $p<.01$, $\eta^2=.252$, $F=36.985$, $df=3,615$, $p<.01$, $\eta^2=.366$, $F=20.0831$, $df=3,615$, $p<.01$, $\eta^2=.523$)、40歳代では50%群にのみ有意傾向が認められた($F=2.3651$, $df=3,615$, $p<.10$, $\eta^2=.253$)。さらにHolm法による多重比較を行った結果、年齢大学生では、25%以下群において協調①と独立①、協調①と独立②、協調②と独立①、協調②と独立②の間で有意差が認められた(いずれも $p<.05$)。50%群において協調①と独立①、協調①と独立②、協調②と独立①、協調②と独立②の間で有意差が認

められた（いずれも $p < .05$ ）。75% 以上群でも協調①と独立①，協調①と独立②，協調②と独立①，協調②と独立②の間で有意差が認められた（いずれも $p < .05$ ）。年齢 40 歳代では 50% 群のみに有意傾向が認められた（ $p < .10$ ）。この有意傾向をさらに調べると協調①と独立①の間に有意差が認められた $p < .05$ ）。25% 以下群，75% 以上群では有意差は認められなかった（Fig.2 参照）。

Fig.2 図形判断傾向における相互独立的・相互協調的自己観の値



3. 年代による絶対判断の偏り

絶対判断群の割合が 25% 以下群，50% 群，75% 以上群に人数の偏りがあるかどうかを調べるために χ^2 乗検定を行った。その結果，人数の偏りが認められた（ $\chi^2 = 51.264$ ， $df = 2$ ， $p < .001$ ）。

Table 1 絶対判断群の割合

絶対判断群の割合	25% 以下群	50% 群	75% 以上群	合 計
大学生	66	23	29	118
40 歳代	8	40	45	93
小 計	74	63	74	211

考 察

本研究は，図形の絶対判断と相互独立的・相互協調的自己観と年齢との関連

性について検討した。

今回の調査では、図形判断課題において、大学生では、絶対判断が25%以下（相対判断が多い）の者が他の群に比べて多かったが、40歳代では、絶対判断が25%以下（相対判断が多い）の者は少なく、むしろ75%以上、50%（絶対判断数と相対判断数が同じ者が半数）が多く、相対判断が少ないという結果となった。この結果は、調査条件は異なるが、Kitayamaら（2003）と異なっており、40歳代では絶対判断がむしろ多いといえる。中村（2021）では、年齢の比較を行っていなかったが、本研究で、年齢による図形の判断傾向の違いがあることが明らかとなった。中村（2018）の時間的切迫感が強い方が絶対判断が多くなるという結果を考えると、40歳代は大学生の学生よりも時間に追われている感覚が強いのかかもしれない。

さて、相互独立的・相互協調的自己観との関連であるが、大学生では、どの絶対判断群でも相互協調的自己観が相互独立自己観よりも高く、群間による差は認められなかった。中村（2018）では、時間的切迫感との関連は相互協調的自己観の中の評価懸念の項目との関連から考察したが、本研究では、大学生での相互協調的自己観の評価項目間に違いがなく、また、絶対反応数による群間の差もなかったことから、評価懸念と時間的切迫感の関連を考えることは難しいと考えられる。一方40歳代では、50%（絶対判断数と相対判断数が同じ者が半数）の時に、有意傾向ではあるが相互独立自己観の方が高いという結果となった。25%以下群、75%以上群では違いが認められなかった。

これらの結果を総合的に考えると、図形の絶対判断と相対判断の違いと相互独立的・相互協調的自己観の関連を見いだすことはできないといえる。つまり個人の中で、思考対象が異なる場合の思考タイプの一貫性は見いだせなかった。

絶対判断というのは、対象物に対していわばスポットライトを当てた状態であり、その形を見るためのいわばボトムアップの情報処理が働いている。これを自己が独立していると同様であると考えerるには無理があるのだろう。つまり、独立するということが周囲の情報を切り離して、その者が自分だけの状態を元に行動を決定しているということではないということが考えられる。自己が独立しているということは、周囲との関係も考慮しながらも自分自身の立場

をはっきりするということであるので、むしろ周囲の情報を十分に取り込んでいることも考えられる。この思考プロセスは協調的自己観と変わらないのではないだろうか。一方、対象物の絶対判断と相対判断の判断過程を考えてみると、絶対判断がボトムアップの情報処理過程を経るのであれば、相対判断は、それらの具体的な情報から共通点を見いだすという、後継の行動であるといえる。このように時間経過が必要であることを考えると、時間的切迫感があると絶対判断が多いという中村（2018）の結果と一致している。このように思考プロセスの一貫性という観点から考えると図形の絶対判断と相対判断の違いと相互独立的・相互協調的自己観の個人内での傾向が必ずしも一致しないことも理解できる。

あとがき

中村（2018）は自己観との関連を調べ、この自己観の下位概念である依存「評価懸念」が、絶対判断に影響を与えていることを報告し、「この結果は、「評価懸念」の強い人が、時間的に逼迫した状況で早く判断する必要性を感じ、直感的に判断できる絶対判断が多くなるのではないか」と考察している。しかし、今回の調査では、同じ結果が見いだせなかった。それは相互協調的自己観の値がどの群でもとても高かったためである。自己観が文化の影響を受けるのであれば調査した時期の影響も受ける可能性もある。この調査は2024年秋に行われたものであり、新型コロナによる3年ほどの自粛期間を経た1年後であった。それを考えると、直前の生活様式、人間関係が自己観に与えた影響を無視できないかもしれない。

注1：調査参加者は、大学のN授業の参加者であり、質問紙の回答と世代の違うデータの収集とレポートを課せられた。個別の提出であるが、全員分の分析をするために使用する旨を口頭で説明し、了承を得た。

引用文献

- Kitayama,S., Duffy,S., Kawamura,T., & Larsen,J.T. (2003). Perceiving an object and its context in different cultures: A cultural look at the New Look. *Psychological Science*, **14**, 201-206.
- Kuenne,M.R. (1946) . Experimental investigation of the relation of language to transposition behavior in young children. *Journal of Experimental Psychology*, **36** (6), 471-490.
- Ji,L.J., Peng,K., & Nisbett,R.E. (2000) Culture, control, and perception of relationships in the environment, *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 943-955.
- Murkus,H.R. & Kitayama,S. (1994) The cultural construction of self and emotion: Implications for social behavior. In S. Kitayama & H.R. Marcus (Eds.) *Emotion and Culture*. Washington D.C.: American Psychological Association. Pp.89-130.
- 中村奈良江 (2018) 刺激提示時間の絶対的判断と相対的判断への影響 西南学院大学人間科学論集 **13**, 153-161.
- 中村奈良江 (2021) 絶対的判断と相対的判断課題における文化の影響—文化方向性尺度と相互独立的・協調的自己観尺度において— 西南学院大学人間科学論集 **16**. 17-25
- Nisbett,R.E. (2003) The geography of thought: How Asians an Westerners think differently ...and why. Free Press. (村本由紀子訳, 2004『木を見る西洋人 森を見る東洋人—思考の違いはいかにして生まれるか』ダイヤモンド社)
- 高田利武, 大本美千恵, 清家美紀 (1996) 相互独立的－相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良大学紀要 **24**, 157-173.

西南学院大学人間科学部心理学科